

「東アジアプログラム」と東アジア「越境人」の育成

柳静我*・柳原邦光*

Cultivating the Transnational Talents in East Asia through the East Asian Program

YU Jeungah and YANAGIHARA Kunimitsu

キーワード： 東アジアプログラム, 越境人, 東アジア研究

Key Words: the East Asian Program, the Transnational Talents in East Asia, Research for East Asia

はじめに

鳥取大学地域学部では、2016年8月1日から9日まで「東アジアプログラム」を開催した。これは中国廈門大学・韓国翰林大学校・台湾高雄師範大学と地域学部地域文化学科との学生相互交流プログラムで、「東アジアで語学力と現地感覚をもって活躍できる人材を育成するプロジェクト」の一環である。参加したのは、廈門大学の学生10名と教職員3名、翰林大学校の学生24名、教員1名、高雄師範大学学生2名、教員1名で、総数41名である。高雄師範大学からの参加者が少ないのは、急遽参加が決まったからである。鳥取大学地域学部からは、学生20名あまり（様々な形で関わったので正確な数字がわからない）、教員7名（地域文化学科5名、地域政策学科2名）と職員1名が参加した。この他に、鳥取大学国際交流センター関係者には日本語授業担当として、また、鳥取銀行職員、鳥取市中央包括支援センター職員、小規模多機能型居宅介護事業所の方々にも、講演や施設案内などの形で、協力していただいた。

「東アジアプログラム」を開催できたのは、2年間の準備過程があったからである。すなわち、2014年度から鳥取大学地域学部に廈門大学と翰林大学校を迎えて「日本語・歴史・文化プログラム」を実施してきたこと、同じ趣旨の研修を廈門大学（3月、語学は中国語）と翰林大学校（8月、韓国語）でも実施し、地域文化学科の学生が参加してきたこと¹、台湾では、2014年度から高雄師範大学の教員のご協力を得て、地域文化学科「東アジア地域調査グループ」が台湾地域調査実習（9月）²を行ってきたこと、である。このような交流実績を積み重ねて、4大学の「東アジアプログラム」となったわけである。これまでの試みと比べて、「東アジアプログラム」の新しい点は、別個に開催してきたプログラムを4大学合同企画とし、従来の研修内容（「日本語・歴史・文化」）に新たに「地域」を加

* 鳥取大学地域学部地域文化学科

¹ 地域学部学生の参加費用については、地域学部の向徳会奨学金から1人当たり最大5万円の補助を得ている。また、地域文化学科からの5万円と、地域学部の保護者会である助成会から学科にいただいている支援金の一部を調査費用に充てている。このような様々な支援のおかげで研修が可能になった。廈門大学、翰林大学校、台湾高雄師範大学については、それぞれが獲得したプロジェクト資金を活用している。

² 台湾地域調査実習の内容については、以下を参照。柳静我・柳原邦光・浅田萌・池本愛里奈・岡田紗希子・栗田瑞徳・徐元俊「東アジアを調査する—台湾語教育と媽祖信仰を通して—」『地域学論集』第12巻第1号、2015年、柳静我・柳原邦光・呉玲青「東アジアを調査する—台湾の牡丹社事件と民間信仰を中心に—」、『地域学論集』、第13巻第3号、2015年。

えたことである。具体的には、「地域」について考えるテーマとして「地域は少子高齢化と過疎化にどう向き合っているか」を設定した。そうすることで、2004年の学部創設以来、鳥取大学地域学部が構想してきた地域学とその成果³をプログラムに組み込んで、研修内容のさらなる充実を図ったのである。

ところで「東アジアプログラム」は、後に詳述するように、「東アジア研究」とセットになっている。「東アジア研究」では、2015年度から「国際化拠点整備事業費補助金（グローバル人材育成推進事業）」を活用して、これまで中国、韓国、台湾、そして国内の研究者を招いて講演と意見交換会を開催し、知を蓄えてきた。この「東アジア研究」と「東アジアプログラム」が「東アジアで語学力と現地感覚をもって活躍できる人材を育成するプロジェクト」を支える大きな柱である。プロジェクト全体で目指しているのは、①「東アジアで語学力と現地感覚をもって活躍できる人材の育成」と、②知と体験の蓄積を基にして「東アジア地域学」を構築することである。もちろん、この2つは支え合う関係になっている。

とはいえ、最初から明確な構想があって現在に至っているわけではない。バラバラになんとか始めた試みが自ずと連動して、大きな目標が視野に入ってきたのである。そして、思いがけなく大きなチャレンジをすることになった。「キャンパスアジア」申請である。鳥取大学は、地域学部を中心に、厦門大学（人文学院）と翰林大学校（社会科学大学政治行政学科）と共同で、文部科学省の「平成28年度大学教育再生戦略推進費『大学の世界展開力強化事業』計画調書～アジア諸国等との大学間交流の枠組み強化～」（キャンパスアジア、事業期間5年間）の「タイプA-②」に応募した。残念なことに採択されなかったが、共同申請した3大学の間でそれまで行ってきた活動を振り返り、将来の展開に向けて意見交換し、成案にまでこぎつけた。それは得難い経験となった。互いの理解が深まり、つながりを強めることができたからである。こうして、4大学で行う「東アジアプログラム」の重要性は、一層大きくなった。

本稿は、これまでの様々な試みをたどり、積み重ねてきた成果をひとつひとつ確認しながら、「東アジアプログラム」のもつ可能性と意義について検討するものである。最初に「東アジアプログラム」開催に至るまでの経緯を説明する。次に同プログラムの概要と、実施して得られた手応えとを確認する。さらにプロジェクトのもう1つの柱である「東アジア研究」の概要と「キャンパスアジア」申請書で合意に達した3大学の共同構想を詳しく紹介して、「東アジアプログラム」の意義を明確にしたい。

第1章 「東アジアプログラム」に至る経緯

1. すべては「応用ゼミ」から始まった

わたし（柳静我）が鳥取大学地域学部地域文化学科に教員として赴任したのは、2013年4月である。地域文化学科では、「現代東アジア地域論」「現代東アジア文化論」などの科目を担当することになった。わたしが長年研究してきたのは中国史、とりわけ「18世紀清朝とチベットとの関係」である。授業で地域文化学科の学生たちと向き合ってみると、彼らは地域や文化に漠然とした関心をも

³ 柳原邦光・光多長温・仲野誠・家中茂『地域学入門—（つながり）をとりもどす—』、ミネルヴァ書房、2011年を参照。

ってはいるものの、特に歴史学に興味があるわけではなかった。ましてや中国やチベットの歴史に大きな関心を示すとは思われなかった。そのため、授業で地域や文化を歴史と結びつけ、興味を引き出すことができるかどうか、わたしにとって大きな課題となった。さらにいえば、学生たちの視野を過去へ、東アジアへ広げること、そこから現在をみつめて、未来を構想すること、そんなことを、漠然とではあるが、考えた。

ちょうど、地域文化学科では新しい試みを始めたところだった。新たに4つの学修コースを設けて、学生たちに選択させることにしたのである。学修コースは2年次後期から始まった。その最初のゼミが「応用ゼミ」である。3年次の専門ゼミで自分の専門分野を確定する前に、2年次後期の半年間に専門について考える機会を設けたのである。そこには熟考と選択を促すことで学生たちの専門性をできるだけ高める狙いがあった。4つの学修コースの1つに「多文化学修コース」があり、ヨーロッパや東アジアの歴史と文化の教員、アフリカの文化人類学を担当する教員が配置されていた。このコースでは、教員の専門分野があまりにも異なっていたために共同ゼミの開講は断念して、それぞれの教員が別個に応用ゼミを開講することにした。

2013年度の場合、6名の学生がわたしの担当する東アジアを応用ゼミに選んだ。そこで、中国史に関する文献（特に東アジアとの関わりを視野に入れた文献）を選んで、学生にレジユメを使って発表させることにした。また、ほかに週1回の勉強会に参加して中国語か韓国語を学ぶよう求めた。まずは言葉から学ぶことにしたのである。さらに、文献と言語の授業で学んだことを現場で確認するために現地調査を実施した。初めての調査地域として台湾を選んだ。別の学修コースの学生1名を加えて合計7名を引率して、台北や高雄などを調べた。このとき、台湾の国立高雄師範大学の呉玲青先生の協力を得ることができた。参加した学生たちは自分たちでテーマを決めて、あらかじめ文献で調べた上で現地調査を行い、疑問に感じたことを持ち帰って、さらに文献を調べたのである。わずか2単位の授業のためによくもこれだけのことをしたと、今思えば、われながら呆れるが、すべての始まりはここからだった。

3年次では「専門ゼミⅠ」と「専門ゼミⅡ」で文献の講読を続け、週1回の言語の授業も続けた。さらに韓国翰林大学校人文学部日本語学科と中国廈門大学人文学院と協議して、2014年度から約10日間の「韓国語・歴史・文化プログラム」（於翰林大学校）と「中国語・歴史・文化プログラム」（於廈門大学）を実施した。地域文化学科の3年次学生を中心に他の学年も参加したこのプログラムには、言語学習のほかに、歴史と文化に関わる講義と調査を組み込んだ。相手先大学の教員と学生も参加して、プログラムは素晴らしい交流の機会となった。

もう1つ工夫したのは、中国語と韓国語の勉強会に参加している学生たち（別の専門ゼミの学生も参加）に語学検定試験の受験を勧めたことである。一番多いのは中国語の検定試験（HSK）で、受験したのは中間レベルの3級である。韓国語の検定試験についても同様である。もっと中国語を勉強したい学生には、交換学生制度を通じて廈門大学や北京林業大学への留学を勧めた。その結果、2016年度まで4名の学生が半年間の留学を経験して、もっと上のレベルの検定試験にチャレンジし、合格している。

以上の試みと工夫を積み重ねることで、全体として地域と文化と歴史を関係づけた学修の仕組みを構築することができた。4年次の卒論テーマは、韓国、中国、台湾の歴史や文化に関するものが多いが、嬉しいことに、一国を超えて、学生たちの間に東アジアという「地域」で発想し考察しようとする態度が生まれている。

2. 相互的な「語学・歴史・文化」プログラム

ここでは相互的な「語学・歴史・文化」プログラムを紹介する。2014年度から地域学部と翰林大学校の間で、2015年度からは地域学部と厦門大学との間で、相互交流プログラムを始めた。特に厦門大学とは、3月に地域学部の学生と教員が厦門大学を訪ね、8月には厦門大学の選抜された学生10名と教員が鳥取大学にやってきて、それぞれ10日間の「語学・歴史・文化」プログラムに参加している。

厦門大学との交流プログラムを詳しく紹介すると、2015年3月に始まった厦門大学でのプログラムに参加したのは、わたし(柳)以外は学生8名で、内容も語学中心であったが、2016年には、教員交流と調査実習を加えることができた(学生参加は10名)。

教員交流は、わたしのほかに地域文化学科教員2名(地域学部副学部長と地域文化学科長)が厦門大学人文学院の教員3名(副学院長と歴史学科長を含む)とそれぞれの機関のスタッフや資料の紹介、研究テーマの確認、研究報告などの学术交流や座談会を行った。また、厦門大学の国際交流担当副学長に招かれて、国際交流について意見交換も行った。なお、わたしは、求められて、工学院で学生のために中国語で講演をした。

調査実習については、厦門から船で20分のところにある、台湾領の金門島で「中台関係の過去と現在を見る」ことをテーマとして、厦門大学の学生や教員と共同調査を行った。金門島は中台関係が緊張した時期、中国の砲弾を集中的に受けた所である。ここには清朝時代の歴史的遺跡がある。興味深いことに、中台関係が落ち着いて友好的になった現在では、砲弾を使って包丁を作り、島の特産品として販売している。学生たちは現場を見て、中台関係の厳しい現実と小さい島の人々のたくましさなどを学んだ。

次に鳥取大学での試みを紹介すると、2015年8月に「日本語・歴史・文化」プログラムとして、日本語の授業のほかに、地域学部教員による日本の歴史と文化の講義、鳥取や大阪での史跡等の見学、厦門大学教員による「東アジアを生きる人々」をテーマとした講演などを実施した。厦門大学からの参加学生は選抜されてやってきた10名である。地域文化学科の学生たちは、授業のサポートから食事や買い物などの生活サポートまで、様々な形で厦門大学の学生たちと関わり、短期間に親密な関係を築くことができた。

厦門大学と鳥取大学でのプログラムは、学生たちに大変好評で、厦門大学のプログラムで支援者として参加した厦門大学の学生が、鳥取大学のプログラムに参加し、今度は地域学部の学生たちがサポートするという形で、互いに助け合う好循環が生まれている。これまで2名ずつではあるが、交換学生として半年間程度留学する学生もいる。この動きは、2016年8月に鳥取大学で開催された「東アジアプログラム」に韓国翰林大学校⁴と台湾高雄師範大学の学生たちが参加したことで、日・中・韓・台の「東アジア」交流へと発展した。なお、2017年3月1日から11日まで厦門大学で同様のプログラムを実施することになっている。地域学部地域文化学科と高雄師範大学から学生と教員が参加する予定である。

3. 台湾地域調査実習

最後に地域文化学科2年次の必修科目である地域調査実習について紹介しよう。2014年度から地

⁴ 翰林大学校との交流プログラムでは、翰林大学校でのプログラムに地域学部から2014年度と2016年度で合計30名が参加し、鳥取大学でのプログラムには翰林大学校から2014～2016年度に合計88名が参加している。

域調査実習に東アジアグループが加わった。担当教員は柳静我と柳原邦光である（2015年度からは日本史の岸本覚教授が台湾調査に加わっている）。それまで調査実習の対象が国内であったのに対し、海外に範囲を広げて、対象地域を大きく捉えたいと考えたからである。そこで最初の調査実習の場として台湾を選んだ。というのも、台湾は、外部から次々と支配者がやってきて文化を持ち込み、それらが複雑に絡まり重なり合って形成された地域だからである。東アジアにおける多様な文化の関係性・重層性・多層性を考えるには、最適な地域だと思われた。また、2013年度応用ゼミで台湾調査を行った際に、高雄師範大学の呉玲青先生のご協力をえられたことも関係している。呉先生は、地域調査実習でも現地コーディネーターとなってくださって、調査先の選択から現地の方々の紹介、日程の決定などの下準備までお世話してくださっている。また、鳥取大学に何度も来学されて、調査テーマに関する講演をさせていただいている。そのおかげで、これまで3年間、実質をともなった調査をすることができた。

地域調査実習の概要を紹介すると、授業では、4月に基本文献の講読から始めて、調査する地域とテーマを学生たちと相談して決定する。そして、呉先生と相談しながら、台湾での適切な調査場所と対象を選定する。9月に5泊6日の日程で現地調査を行い、後期授業で、現地調査結果を整理して、問題点やさらに掘り下げる点を明らかにし、文献で調査する。10月に学部内で中間発表を行い、年を越えて、1月の市民に公開される「地域文化学科地域調査成果発表会」で発表する。最後に3月末をめどに報告書を作成し、5月頃に印刷を終了する。報告書は調査を通じてお世話になった方々や地域文化に関わる機関などに送っている。3年間の調査テーマと参加学生数は、次の通りである。2014年度「台湾の文化を考える一言語と媽祖信仰を通して」（参加学生11名）、2015年度「台湾と東アジア—牡丹社事件と民間信仰を通して—」（参加学生17名）、2016年度「台湾における日本統治時代の『遺産』と記憶」（参加学生17名）である。地域文化学科全体の地域調査実習の成果については、報告書を公開している。

調査の具体的な成果については、別稿に譲ることとして、調査体験は学生たちにたくさんの感覚的な「気づき」をもたらしたようである。実際に現地を訪ね、多くの人達に出会って、直接に話をうかがうのであるから、インパクトは大きく、強く印象に残るようである。実際、調査実習に参加した学生たちのなかには、上述した中国や韓国での「言語・歴史・文化」プログラムに参加したり、2016年に鳥取大学で開催された東アジアプログラムに関わった学生が少なくない。また、専門ゼミや卒論の選択にも影響しているようである。このように、応用ゼミの地域調査から始まった台湾地域調査実習、中国廈門大学でのプログラム、韓国翰林大学校でのプログラム、そして東アジアプログラムは、全体として、2年生後期から卒業まで、「地域・文化・歴史」をセットとした、持続的で体系的な学習の場となっているといえる。

第2章 「東アジアプログラム」の概要と成果

最初に、東アジアプログラムの日程を紹介すると、下記の「2016年度東アジアプログラム日程表」にある通り、9日間の日程のうち、日本語授業が7回、講義・講演が8回、地域調査関係3回（そのうち2回が終日）で、それぞれに地域学部地域文化学科の学生たちが参加してサポートした。このほか、公式プログラム以外に学生たちの独自企画もあった。食事会、バーベキュー、カラオケ、買い物などである。

2016年度東アジアプログラム日程表

日付	内 容
8月1日	14:00 開講式 (地域学部大会議室) 14:45~16:15 日本語授業 18:00~20:00 歓迎夕食会 (鳥取大学広報センター2階)
8月2日	8:45~10:15 竹川俊夫 (地域政策学科准教授) 講義 「日本の福祉政策の体系と高齢者福祉のあゆみ」 10:30~12:30 同講義「介護保険制度の概要と地域包括ケアシステムの構築」 13:30~14:00 鳥取市役所駅南庁舎・中央地域包括支援センター訪問 14:00~15:30 山本博久氏 (中央地域包括支援センター所長) 講演 「地域包括支援センターの役割について」 中央地域包括支援センターの見学 15:45~16:45 竹本匡吾氏 (社会福祉法人地域でくらす会副理事長) 講演 「高齢者を支える介護保険サービスと生活支援サービス～小規模多機能型居宅介護の役割を中心に」 16:45~17:50 小規模多機能型居宅介護事業所等の見学: 小規模多機能型居宅介護・木守舎, 介護予防サロン・COMMON 吉方温泉
8月3日	10:30~12:00 日本語授業 13:00~14:30 日本語授業 14:45~16:15 船越和樹氏 (鳥取銀行ふるさと振興部 地域ビジネス推進室室長) 講演 「地方の人口減少に対する鳥取銀行の取組」
8月4日	10:30~12:00 日本語授業 13:00~14:30 日本語授業 14:45~16:15 家中茂 (地域政策学科教授) 講義 「地域学の具体的展開事例 林業を始める若者たち 一産業・生活統合型多世代共創コミュニティー」
8月5日	10:30~12:00 日本語授業 13:00~14:30 アレクサンダー・ギンナン・コウジ (地域文化学科助教) 講義 「越境するということ」(英語)
8月6日	〈鳥取の観光地を調査する〉鳥取砂丘, 砂の美術館, 浦富海岸
8月7日	〈旧城下町を歩く〉岸本覚 (地域文化学科教授) による案内と説明 10:00~12:00 鹿野そば打ち体験 12:00~16:00 旧鹿野城下を歩く
8月8日	10:30~12:00 久保堅一 (地域文化学科准教授) 講義「日本古典文学の紹介」 13:00~14:30 日本語授業 14:45以降 翌日の発表準備
8月9日	午前中: 発表準備 13:00~16:15 3大学学生による発表: 各国の少子高齢化対策など 18:00~20:00 閉講式, 送別会 (鳥取大学広報センター2階)

(1) 東アジアプログラムに向けた事前協議

ここからはプログラムのやや詳細な紹介である。8月に東アジアプログラムを実施するにあたって、韓国翰林大学校と中国厦門大学と事前協議を行って、互いの要望や構想を確認した。

2016年1月、翰林大学校の安東奎教授（経営学部経営学科）が来学され、地域学部で意見交換した。話し合いには、地域学部地域政策学科の教員数名（地域福祉、農山村振興、外国人問題、政策評価などの研究者）に参加をお願いした。というのは、安教授から鳥取県の地域への取り組み、とりわけ少子高齢化問題への、金融機関を含めた取り組みを知りたいという要望があったからである。また、すべて英語で行う講義も希望された。話し合いは打ち解けた雰囲気のおかげで進み、「少子高齢化問題への取り組み」をテーマの1つとすることと地域政策学科教員が参加し講義することが決定した。

厦門大学とは、地域学部学生たちが参加した厦門大学での「中国語・歴史・文化」プログラム（2016年3月1日～3月12日）を利用して、地域文化学科教員3名（柳静我、柳原邦光、岸本覚）が厦門大学で協議した。このとき、鳥取大学からは地域学部と地域文化学科の概要及び地域学構想を説明したのち、具体的な研究の一例を紹介した。厦門大学人文学院からは、李晓红氏（人文学院副院長）、张侃氏（歴史学科学科長）、陳永福氏（歴史学科副教授）と研究助手の呉芸氏、さらに人文学院の優秀学生たち（2015年6月に地域学部で行った「日本語・歴史・文化研修」に参加した学生たち）も参加した。张侃学科長からは歴史学科の目的と構成、所属教員の専門研究と海外の大学との研究交流について詳細な紹介があった。その後、学生を含めて意見交換を行って、学術交流と東アジア研究、さらに学生交流について見通しを立てることができた。歴史学科は40名を超える教員と豊かな研究資源を有しており、すでに海外の諸大学と積極的に共同研究を行っているが、地域学部にも興味を示され、交流をしたいとのことであった。また、厦門大学国際交流担当副総長である譚紹濱氏には、交流会に招いていただいて、国際交流について意見を交換し、両大学間の将来の交流についていい展望をもつことができた。

(2) 地域学を組み込んだ東アジアプログラム

鳥取大学での東アジアプログラムのあらまは「はじめに」で述べた通りだが、計画段階では、地域学として「地域は少子高齢化と過疎化にどう向き合っているか」のほかに、もう1つ「越境すること」ということをテーマに設定していた。ローカルな地域だけでなく、国境や様々な境界を越えて生きるとはどのような経験なのか、検討して、「東アジア地域学」に組み込もうとしたのである。そのために地域学部の柳静我准教授とアレクサンダー・ギンナン・コウジ助教、そして厦門大学の陳永福副教授の講演を予定していた。それぞれ国籍は韓国、カナダ、中国で、自国以外での長い生活経験がある。ところが、実際にプログラムをスタートさせてみると、参加学生のスケジュールと学習内容から見て無理なことがわかり、ギンナン・コウジ助教の講演を除いて断念せざるをえなかった。「2016年度東アジアプログラム日程表」にあるように、学生たちは午前中に日本語を学び、午後に地域学や日本文化の講義を受けるか、地域調査（鳥取の地域福祉、鳥取の観光地、旧城下町鹿野の調査）に参加した。最後にプレゼンテーションで学んだ成果を提示した。短期間に実に盛りだくさんな内容だった。

ということで、ここでは「地域は少子高齢化と過疎化にどう向き合っているか」を考えるためにどのような内容を用意したか、説明するにとどめる。

講義・講演として3回の機会を設けた。最初に、竹川俊夫准教授（地域政策学科）の「日本の福祉政策の体系と高齢者福祉のあゆみ」と「介護保険制度の概要と地域包括ケアシステムの構築」（合わせて3時間30分）である。前半の講義では、現実と向き合いながら日本の社会福祉制度がどのよう

に成立・発展し、現在、どのような問題に直面しているかを、統計データを駆使して、構造的問題として説明された。後半の講義では、現在の問題への国の制度的取り組みと地域の対応、それでもなお克服しがたい深刻な課題であることが示された。このような理解を得たのち、学生たちは、午後、現場に向かい、「地域包括支援センター」と民間の「高齢者を支える介護保険サービスと生活支援サービス～小規模多機能型居宅介護～」の活動について、関係者の説明を聴き、施設を実際に自分の目で見て、鳥取でどのような認識のもとにいかなる取り組みがなされているか、具体的に確認することができた。

次に鳥取銀行ふるさと振興部地域ビジネス推進室室長である船越和樹氏の講演「地方の人口減少に対する鳥取銀行の取組」である。船越氏は講演依頼を快諾されただけでなく、内容について地域学部教員と幾度も協議を重ねて、わかりやすい、見事な講演をしてくださった。そのエッセンスをまとめると次のようになる。深刻な人口減少は地域を崩壊させるが、地方銀行にとっては顧客と事業の存続をとともに失うことを意味している。したがって、地域の持続性確保が最重要課題である。銀行にとって、それは地域で生きる人々の生活を金融活動によって支えることである。そのためにできることは何か、それを懸命に考えて、全国的組織との連携や大都市から鳥取県への移住促進を支援する活動など、様々な工夫を重ねてきた、ということである。講演は具体的な統計データと活動事例をたくさん紹介しながら進められたが、説得力ある明快な語り口で、学生たちの胸に届いたようである。講演後、学生たちは船越氏をはじめとする鳥取銀行の職員の方たちと嬉しそうに写真撮影をしていた。

3つ目は、家中茂教授（地域政策学科）の講義「地域学の具体的展開事例 林業を始める若者たち—生業・生活統合型多世代共創コミュニティ—」である。この講義は事例として鳥取県智頭町で自伐林業を始めた若者たちを取り上げて、地域で自然と向き合い、自然を尊重しつつ仕事（生業）と一体となった生活を築いて地域を持続させようとする動きを紹介して、その意義を語ったものである。要約して紹介すると以下のようなになる。

このような動きが重要なのは、深刻な現状があるからである。まずは都市—中山間地域（地方）の不均衡である。中山間地域は過疎化と高齢化の深刻化とともに著しく疲弊している。仕事がなく、過疎化ゆえの担い手喪失によってコミュニティ機能は大きく低下し失われつつある。要するに、「生業の問題」と「生活の問題」が重なって、負のスパイラルを描いている。その一方で、大都市への人口集中が進んでいる。ただし、都市部も問題を抱えている。個人化の進展と同時に、仕事（雇用）と食、教育・保育、福祉など生活の個々の要素が断片化し、生活の全体性が見えなくなって、人々は心身の消耗状態にある。そのため、田園的生活を求める移住希望者が年々増加する傾向が現れている。

このような全体状況を視野に入れたとき、自伐林業を始めた若者たちのもつ可能性がはっきりと見えてくる。というのは、彼らは中山間地域最大の資源である森林を、できるだけ自然を壊さない形で持続的に利用することで生業を創り出し、生業と生活を統合することを通して生活の全体性を回復し、次世代につなごうとしているからである。このような形で多世代をつなぎ、共にコミュニティを創造する可能性を示している。この動きは地方が都市からの移住先として確かな選択肢となる可能性を拓くとともに、中山間地域において well-being を追求する「生業・生活統合型多世代共創コミュニティ」の実現と都市—地方の不均衡は正へと向かう動きに連なるものである。

以上、3つの講義・講演はかなり高度な内容である。それだけに普通でも伝えるのが難しいが、東アジアプログラムの場合、中国語と韓国語に翻訳しなければならない。実に難しい課題であったが、日本語—中国語の通訳は高雄師範大学の呉玲青助教授、日本語—韓国語は柳静我准教授が担当して、見事に課題を果たした。また、学生たちのプレゼンテーションでは、日本語—韓国語の通訳として

地域文化学科4年生の徐元俊君が加わって、学生の理解を助けた。小規模多機能型居宅介護事業所等の見学の際には、地域文化学科4年生の和田拓巳君と3年生の長谷涼花さんが日本語－中国語の通訳を務めた。

それでは、学生たちはどう受け止めたのだろうか。細部についてはうまく消化できなかったかもしれない。それでも相当なインパクトがあったことは確かである。また、少子高齢化や過疎化の深刻さと、様々な行政組織、企業、NPO などの連携と多様な取り組みなど、その想像をこえた活動内容に驚いたようである。学生たちが、これからどんな状況に直面することになるのか、国の制度はどうなっているのか、地域はうまく対応できるのかといった、自分の問題として考えようとしていることは、彼らのプレゼンテーションから伝わってきた。

プレゼンテーションでは、厦門大学と高雄師範大学の学生たちは、少子高齢化に伴う地域福祉活動に特に強い関心を示し、自国の制度や取り組みを調べて、聴講した内容と比較しつつ、自分たちの考えを発表した。厦門大学の学生たちは、来日する前に事前調査をしたようで、緻密な報告だった。高雄師範大学の学生たちは、内容も素晴らしかったが、発表を流暢な日本語で行い、続いて中国語でも行って、驚かせた。彼女たちは鳥取の地方銀行はあんなことまでするのか、と大変驚いたようである。翰林大学校の学生たちは、参加数24名ということで、いくつかの小グループに分かれて、地域調査や文化の授業を含めて、様々なテーマを取り上げて発表した。なかには思いがけない点に反応したものや笑わせてくれるものもあって、文化の違いを感じさせるとともに、大いに楽しませた。

すべての発表を聴いて、問題意識の違いを含めて、制度や考え方など、それぞれの違いと類似点がよくわかった。短い時間でよく調べたものと感心した。地域文化学科の学生たちにとっても参考になったことだろう。どの国や地域でも必ず直面する、同じ切実な課題に取り組んだことで、それぞれの制度や組織の違い、さらには問題の受け止め方や対策の違いなどがよくわかった。4大学合同企画の利点を感じられた。

企画・主催する側として反省すべき点も明らかになった。3つの講義・講演では地域学部の構想する地域学のうち、最も重要かつ実践的なところを紹介した。聴講してみて、話し手の熱意としっかり準備された素晴らしい内容に感銘を受けた。学生は深い内容をどこまで理解したのだろうか、それを思うと、もっと時間を用意して、学生たちにゆっくり考える時間的余裕を提供すべきだった。中国語と韓国語に翻訳したレジュメを配布することも、企画当初は考えたが、通訳をさせていただいたお2人にそこまでの負担をかけることはできないので、断念した。

見直すべきことは少なくないが、このように生活に直結した切実な共通課題をテーマとして取り上げて、いくつか講義や講演を組み、そこで得た情報と学生たちが自分たちで調べた情報とを照らし合わせつつ、4つの大学の教員と学生たちで意見交換する方法は、学术交流や学生交流にとっても、「東アジア地域学」の構築にとっても、大変有効である。鳥取大学地域学部の構想する地域学は、現在、どちらかといえば、ローカルな地域を重視しているが、これからはローカルな問題に向き合いながら、同時に大きな地域を視野に入れて考える必要がある。どうすればそれが可能になるのか。この問題を考える上でも、東アジアプログラムは大いに貢献できることだろう。

(3) 地域文化学生にとっての東アジアプログラム

中国・台湾・韓国・日本の学生たちは国と言葉の違いを感じながら不安な思いで、プログラムに参加したに違いない。プログラム自体がなかなかハードなスケジュールと内容だったし、ちょうど鳥取市で高校体育の全国的な大会が開催されていてホテルが取れず、鳥取大学のゲストハウスにも収容

しきれずに、サークル用の宿泊施設で合宿のような生活になったことも、負担になったかもしれない。学生たちはみな元気にプログラムをこなしていき、一人の脱落者もなかったのであるが。

サポート役に回った地域文化学科の学生たちも、実によく頑張った。もちろん、言葉の壁があった。学生たちに聞いたところ、とくに、プログラム最終日の3大学学生による、各国の少子高齢化対策などをテーマとした発表では、相当な苦労があった。しかし、テーマをめぐって共同作業を行ううちに、言葉でなくてもわかるようになって、「進んでいる」という実感が出てきて、協力できる雰囲気次第に強まっていったという。言葉も文化も違うなかで、ともに何かを仕上げていくという体験、これこそが東アジアプログラムの成果の一つといえる。もちろん、インフォーマルに過ごした時間も重要で、送別会の時、互いに別れを惜しむ様子がとても印象的だった。

第3章 東アジア研究

「東アジア研究」は地域学部や地域文化学科が全体として取り組むプログラムではない。地域文化学科に所属する歴史学の教員3名が中心となって構想し動かしてきた。2015-2016年に、中国・台湾・韓国と国内の8つの大学等研究機関の研究者延べ14名の講演を実現できた。講演には教職員と学生が参加し大いに学ばせていただいたが、この企画は以下の経緯で始まった。

2014年8月、柳准教授を中心に翰林大学校人文学部日本語学科の学生たちのために、地域学部で「日本語・歴史・文化研修」を始めた。これが大変好評で、先方からもう1度してほしいとの依頼を受けて、2015年1月に2回目を開催した。そのとき、引率教員として史学科の崔宰榮先生が来学されたので、講演をお願いした。崔先生は「隋唐長安城と東アジア」という題目で、東アジア諸国の使節が集まった長安城という都市空間とそこで展開された儀式的分析を通して、長安城を中心として隋唐王朝の諸制度や文化が円心的に東アジア世界に広がり、王朝の統治を正当化し、秩序を形成したこと、また、長安城で共有された観念が朝鮮王朝と大韓帝国の漢城建設や中華人民共和国の北京建設にまで長期的に影響を及ぼし続けていることを紹介された。これがとても面白くて、「日本語・歴史・文化研修」で来られる先生方には東アジア関係について講演をしていただくことにしよう、また興味深い研究をされている専門家をお招きして、学生たちと一緒に楽しもう、学ばせていただこう、となったのである。その結果が、講演者一覧表である。

したがって、首尾一貫した目的や計画があったわけではない。ところが、一覧表にしてみると、わたしたちがどんなことに関心をもっているのか、はっきりしてきた。列举すると、1つは、東アジアにおいてどのようにして秩序が形成され、維持されてきたのか、あるいは変化してきたのか、である。2つ目は、近現代の国民国家・領土・国籍・国民意識という枠組みだけでなく、人やモノの移動に着目して、国家とは異なる、もっと緩やかなつながりや関係性に着目し、秩序形成の問題もこのような視点を含めて再考したいということである。本稿の冒頭で述べたように、海域から考えるのはとても魅力的である。時代は、近代以前、主に近世である。そのころ、人々はどのような認識や発想の仕方をしていったのか、どんな形で秩序が存在しえたのか、そこから近現代を捉え返すと、どのように見えるのか（たとえば、陳永福氏講演「日中国境の狭間に置かれた人々」、村上衛氏講演「最後の中国海賊」）。3つ目は、そうした世界における多様な文化の存在とその多層性や関係性への着目である（呉玲青氏「台湾における媽祖信仰の歴史的発展過程」）。

このほかに、わたしたちの前提自体もはっきりしてきた。当然のことながら、わたしたちは歴史学

的な発想で構想してきた。歴史学的な講演題目が多いし、現代台湾の媽祖信仰や民間信仰を取り上げる場合も、歴史的視点を欠かすことはない。しかし、こうもいえる。過去を見る場合も、現在を忘れることはない。過去から現在までの長い時間のなかで、持続や断絶のなかで、今日の現象の意味を問おうとしている。実際、歴史学的題目であっても、現在との関連を視野に入れた講演がほとんどである（岸本美緒氏『『多民族国家』清朝の遺産』）。また李曉紅氏「中国厦門大学の国際化について」、安東奎氏「オリンピックと地域活性化」、朴燮亨氏「ITと東アジア」のように、歴史学と関係がないような題目もある。要するに、わたしたちは歴史学的な関心からスタートしながらも、地域学の視点も加えて、東アジアを捉えようとしているのである。

「東アジア研究」講演者一覧表

日付	氏名	所属	講演題目
2015年1月8日	崔 宰榮	翰林大学校史学科助教授	隋唐長安城と東アジア
2015年1月15日	崔 溶澈	高麗大学校中文科教授	朝鮮時代の漂流民の対外体験と韓国人の力動性
2015年3月23日	楊 朝傑	台湾中央研究院台湾史研究所研究助理	台湾媽祖廟の年中行事 —雲林県西螺街の福興宮を例として—
2015年3月23日	呉 玲青	台湾高雄師範大学歴史文化及語言研究所助教授	台湾における媽祖信仰の歴史的発展過程
2015年4月13日	李 曉紅	厦門大学中文学科教授	中国厦門大学の国際化について
2015年7月16日	陳 永福	厦門大学人文学部 歴史学科助教授	日中国境の狭間に置かれた人々
2015年8月5日	廉 定燮	翰林大学校史学科教授	朝鮮時代の農業と東アジア
2015年12月2日	岸本美緒	お茶の水大学文教育学部 人文科学科教授	「多民族国家」清朝の遺産
2016年1月25日	鄭 恵仲	梨花女子大学教授	華僑と朝鮮半島
2016年2月16日	村上 衛	京都大学人文科学研究所 准教授	最後の中国海賊
2016年3月16日	安 東奎	翰林大学校経営学部経営 学科教授	オリンピックと地域活性化
2016年3月16日	朴 燮亨	翰林大学校情報電子工科学部 電子工科学科教授	ITと東アジア
2016年3月27日	呉 玲青	台湾高雄師範大学歴史文化及語言研究所助教授	台湾文化研究の今後の方向性について
2016年7月8日	韓 程善	高麗大学国際学部副教授	日本の戦争遺跡保存運動と未来遺産作り

本稿の冒頭で述べたように、「東アジア研究」は「東アジアで語学力と現地感覚をもって活躍できる人材を育成するプロジェクト」を構成する2本柱の1つである。したがって、これまでの講演はみな、学生たちの聴講と積極的なやりとりを前提にしている。つまり、教員は自分たちでは提供できない内容を学外の専門家に伝えていただく。学生たちは提示された内容としっかり向き合い、疑問があ

れば率直に質問しながら、専門科目等で得た知見と関連づけて検討し自分のものにしていくのである。「東アジア研究」では、このような形で知を蓄積していくのが当たり前だという感覚を学生たちにもたらしたいのである。

もちろん、研究としては講演だけでは十分でないので、教員は講演前後の意見交換の機会を重視している。教員もまた難しく考えないで、率直に、遠慮なく疑問をぶつけ合って理解を深めるよう心がけている。プロジェクトの目標の1つは「東アジア地域学」の構築である。いうまでもないことだが、東アジアに限らず、地域学は研究者だけに理解できる言葉ではなく、アカデミックな世界の外の人々にとってもわかりやすい言葉で表現されなければならない。そうなるためには、地域学が立ち上がってくる場自体が、率直でわかりやすい言葉が交換される場でなければならない。

第4章 「キャンパスアジア」申請と将来構想

(1) 「キャンパスアジア」申請

「東アジア地域学」構築を通じた「東アジアで生きる越境人」の養成。これは鳥取大学が地域学部を中心にして廈門大学（人文学院）と翰林大学校（社会科学大学政治行政学科）と共同で文部科学省「キャンパスアジア」（事業期間5年間）のタイプA-②に応募したときのタイトルである。申請書では、「事業の目的・概要等」の項目に以下の文章を掲げて、申請目的を簡潔に述べている。

深刻な環境汚染と経済成長の限界、人口の大都市集中と少子高齢化・過疎化による地域の衰退など、人々の生活基盤そのものが脅かされている今日では、地域に根差し、地域に拠点を置きながら、広い世界を視野に入れて自在に発想し行動する人材、国内外の多様な人々と交わり、関係を創出して、生活基盤を再構築できる人材が求められている。すなわち、以下のような能力をもった人材である。自らの地域について確かな認識をもつとともに、異なる文化や習慣をもつ人々と交わることをためらわず、関係を構築しようとする意欲と実践力、国家を超えた広域的空間に存在する諸文化の複雑な関係を深層から捉えるための知識と「まなざし」、そのために必要な最低限の語学力と現地感覚・現場感覚である。

具体的には、育成する人材の活躍する場として、生活拠点である地域と、現実的に活動の場となる、東南アジアを含めた広い意味の東アジア世界とを設定する。学習内容については、自らの生活の場を含む地域を理解することから始まって、政治的・経済的・文化的構造と特性など、東アジア世界を成り立たせ存続させているものは何か、グローバリゼーションにともなう人・モノ・情報など移動の常態化によって東アジア世界及び域内の諸関係はどのように変化しつつあるのか、いかなる課題を抱えて、どこに向かおうとしているのか、などを学ぶ。これが「東アジア地域学」である。

この申請書（2種類、自国語文と英文）はかなりのボリュームであるが、ごく短い時間で作成することができた。構想に関する協議に3日間、申請書作成に4日間である。言語を異にする3大学間での作業であることと大学内手続きを考えると、短期間で申請にこぎつけたことは奇跡とでもいい。なぜそれが可能だったのかといえば、すでに紹介したように2年間の準備過程があったからである。たとえば、申請した3大学と高雄師範大学の4大学で2016年8月に鳥取大学地域学部で「東アジア

プログラム」を開催することが既に決まっていた。実際に参加したのは、海外の3大学から学生が38名と教職員5名、地域学部からは学生20名あまりと教員6名である。このプログラムは大変好評で、厦門大学と翰林大学校でも同種のプログラムを実施することになっている。キャンパスアジア申請は、残念なことに、採択されなかった。それでも規模は小さいながらもほぼ同趣旨の「東アジアプログラム」は今後も続くので、プログラムの実質をキャンパスアジア申請書の内容にできるだけ近づけていきたい。本章では、「キャンパスアジア」申請書で具体的にどのようなプランを構想したのか、紹介する。

申請書で構想した具体的な教育プログラムは以下の通りである。プログラムは2段階からなる。第1段階は期間7か月、第2段階が半年から1年間で、第1段階を終えた学生で希望すれば大学を選択して留学できる。

以下では第1段階のみ説明する。まず参加学生数は、厦門大学・翰林大学校・鳥取大学の3大学から10名ずつ、合計30名である。そして各大学で2か月間プログラムを実施する。厦門大学（3～4月）、鳥取大学（5～6月）、翰林大学校（7～8月）である。最後に、多民族社会のマレーシアにある厦門大学分校（9月）で学ぶ。授業内容は、実施国の「言語・歴史・文化研修」と実施大学の学術的蓄積を活かした「東アジア地域学」の授業⁵を実施国の言語で行う。実施大学は、他の2大学の学生20名を受け入れ、宿泊施設等を提供する。最後のマレーシア厦門大学分校では、「地域実習」や「企業実習」など諸課題に対処する実践的な取り組みを中心に英語で学ぶ。学生たちは7か月間に及ぶ教育プログラムと共同行動を通して、中国語・日本語・韓国語・英語の言語感覚（東アジアで仕事をするときコミュニケーションが取れる程度の言語能力）と中国・日本・韓国・マレーシアの現地感覚・現場感覚を身につける。このような能力と感覚をもっていれば、東アジアであれば、外国であることを過剰に意識したり臆したりせずに積極的に行動できるはずである。そして冒頭で掲げた人材として活躍が期待できる。

プログラムはこのような人材を「東アジアで生きる越境人」として養成しようとしたのである。要請する学生数は1年間で30名、5年間で150名となる。参加した学生たちは、可能であれば、次年度以降、チューターとして新たな参加学生をサポートする。こうして参加学生150名と関係教員からなる親密な人的ネットワークを形成して、大学卒業後に活用できる連携基盤を構築する。教員は5年間の計画年度の最後に「東アジア地域学」の共通教科書をそれぞれの国でそれぞれの言語で出版し、計画終了後にも事業を効果的に継続できるようにする。

以上の構想は、当然のことながら、かなり細かな工夫をしないと実施できないし、成果もあげることにはできない。何より資金が必要であるが、東アジアプログラムですでに試行したものもある。趣旨を踏まえて、できることからやっていきたい。

(2) 将来構想

「キャンパスアジア」構想では、地域学部の場合、3年生の派遣を想定していた。実施期間が3月から9月の7か月間なので、授業をうまく卒業単位化すれば、4年間で卒業できる。それには3年生で参加した方が、具合がいいのである。しかも、参加した経験と身につけた力は直後に始まる就職活動

⁵ たとえば、鳥取大学は「地域学」のアプローチ、翰林大学校は社会経済的アプローチ（東アジアの国際関係や政治経済構造、地域開発協力など）、厦門大学では、人の移動に着目して地域社会と文化を考える歴史的アプローチ（中国の地域社会史、越境する人々のネットワーク、華僑ネットワーク）、厦門大学マレーシア分校では、多文化社会マレーシアをフィールドに諸課題に対処する知識と方法を学ぶ。

に活かすことができる。どうすればこの構想を活かしていけるだろうか。

これまで東アジア関係で試みてきたことやすでに利用しているものを列挙してみると、東アジア関係の地域学部専門科目、台湾での地域調査実習、東アジア研究の専門家を招いての講演会、鳥取大学での東アジアプログラム、厦門大学と翰林大学校での「言語・歴史・文化研修」、それから柳准教授による中国語と韓国語の勉強会がある。これに全学共通科目（一般教養科目）の「歴史学Ⅱ」（外国史）を加えることもできる。実際がどうかというと、地域文化学科の学生たちのなかには、卒業単位にカウントされなくても、単位にならなくても、これらのほとんどに参加している者が少なくない。さらに、複数言語を身につけようとする学生たちも現れている。英語・中国語・韓国語、中国語・韓国語、あるいは英語・スペイン語・中国語などである。また、半年間から1年間、中国や韓国、台湾に留学した学生もいる。厦門大学の場合、これまで3名が半年間程度の留学をしている（厦門大学からは2名の学生が地域学部で留学しているし、2017年度も1名の留学が決まっている）。こうした学生たちの就職状況もなかなかよく、なかには地方企業に就職して中国語を活かして活躍している者もいる。

以上のことを考慮に入れば、「キャンパスアジア」構想で提示した方向性は間違っていないといえるだろう。重要なのはこの動きを着実に大きくしていくことである。現在、鳥取大学は改革を進めており、地域学部も新しい学部になる。新地域学部の理念は「キャンパスアジア」構想と重なる点が多い。地域文化学科も2017年度に「国際地域文化コース」となる。大きな地域に軸足を移すのである。それに合わせて、東アジア関係でこれまで単位にならなかったものをできるだけ卒業単位に組み込んで、学生が集中的に学習できるようにカリキュラムを整えた。たとえば、厦門大学や翰林大学校での「言語・歴史・文化研修」（東アジアプログラム）や柳准教授の中国語と韓国語の勉強会は、単位化される。「歴史学Ⅱ」も「歴史学」という名称で全学の学生たちの多くが受講する基幹科目となるが、日本史・東洋史・西洋史の教員で「東アジアと西欧近代との出会い」をテーマとして講義することになっている。東アジアプログラム（鳥取大学）を中心ににおいて関係科目を連動させることで「東アジア越境人」の養成につなげたいと考えている。

おわりに

ここまで2014年以來の試みを振り返ってきた。応用ゼミで台湾や中国に行こうとしたとき、学生たちは驚き、ためらった。パスポートをもたない学生も多かった。ところが一度経験すると、「また行きたい、今度はどこ？」というようになり、いつのまにか海外に行くのは当たり前という雰囲気になっていった。今では、留学や各種プログラムで知り合った学生たちがメールで連絡を取り合って再会したり、卒業研究の資料収集のために中国や台湾の大学を訪ねて、教員のアドバイスを求める学生も出てきている。個人旅行を計画する者もいる。まさに驚きの変化である。

教員にも変化があった。柳教員が始めたことをめぐって面白がって雑談をするうちに、次々とアイデアが浮かんできて、「面白い、やってみよう」ということになった。うまくいかなければやめればいい、そんな気楽なスタートだった。ところがキャンパスアジア申請をするまでになった。3大学で連絡を取り合い、話し合っ、食事や睡眠時間を削って、なんとか申請にまでこぎつけた。大変ではあったが、苦勞を楽しんだところもある。採択されなくとも、一緒に頑張った仲間であるという意識が消えることはない。もちろん、申請書で描いた構想を活かそうと、今も努力を続けている。本稿の執

筆もその1つである。まだうまく言語化できないが、この先に重要な何かがあるという手応えがある。それにしても、まさかの展開である。

さらに不思議なことに、実に多くの方々にサポートしていただいた。講演や講義など協力をお願いすると、地域学部の内外を問わず、みなさん、快く引き受けてくださった。予算も何とかあった。また、国内外の多数の先生方に鳥取大学に来ていただいたが、どういうわけか、鳥取を気に入っていただいたようで、みなさん、今やリピーターである。しかも、新たなオファーまである。何もかもがうまくつながっていく。これは一体どういうことなのだろうか。

とはいえ、無理はしたくない。学生も教員も、楽しむこと、学び合うことが最も重要である。これがプログラムの原動力であるので、失われることがないように、プログラムを進めていきたい。

(2017年1月27日受付, 2017年2月1日受理)